

群馬県・北軽井沢発 いいところみつけるフリーマガジン

Take
Free

きたかる

第3号
2012 SPRING

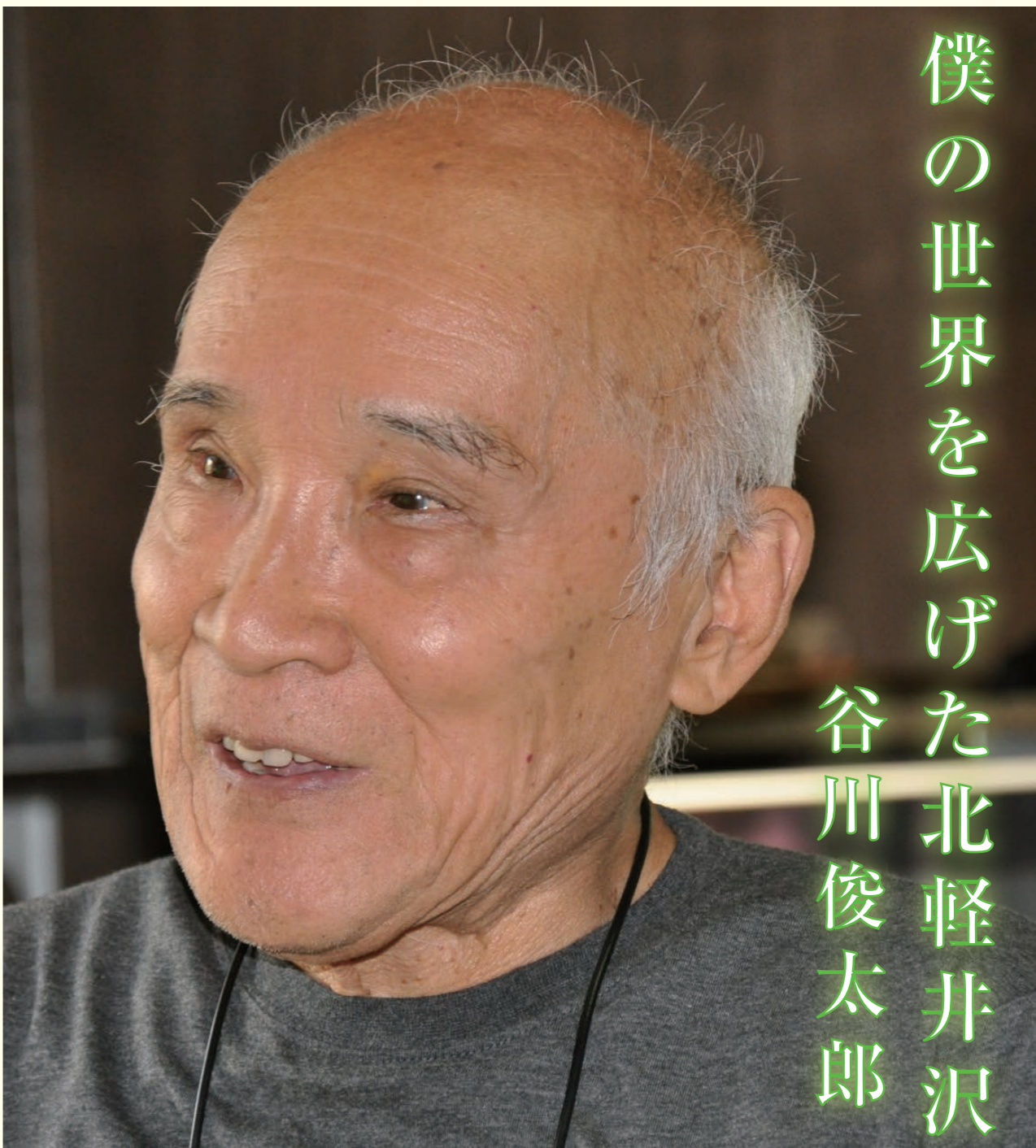
自然が彩る
四季のまち

◆巻頭インタビュー
谷川俊太郎

「浅間山」―塗り替えられる大地―
座談会―きたかるの四季―



僕の世界を広げた北軽井沢 谷川俊太郎



世界に名前を知られた詩人・谷川俊太郎さん。幼いころから訪れていた北軽井沢は、谷川さんにとって、もうひとつの「ふるさと」だという。触れた自然が数々の作品を生み出すきっかけとなっている。そんな谷川さんが見てきた北軽井沢の魅力とは、何だったのだろうか。

—北軽井沢の印象を教えてください。

簡単に言えば自分のふるさとなっていったね。割と今住んでいる東京にも自然はあるんだけど。でもカラマツ林とか、もちろん浅間山っていう活火山が近くにあって噴火を見たとか、自然を知ったのは、北軽井沢の大学村からだ。

—軽井沢など他にも別荘地があると思うのですが、他とはまた違う北軽井沢の良さを教えてください。

夏目漱石の弟子で野上弥生という作家がいたんだけど、その人から言わせると、今のおしゃれな軽井沢は本来の軽井沢じゃなくて、北軽井沢こそが本来の軽井沢だと言って区別していましたね。やっぱり、学者とかが多かったから自然とルールみたいなのができていて、午前中は絶対人の家を訪問しないとか、そういう風に暮らしていたんですね。

戦後は他の人が来たからとどんどん崩れていっちゃいましたけど、始めのうちは静かな学者の村っていう感じだったから、軽井沢とは全然違いましたね。

—北軽井沢の四季について教えてください。

冬はやっぱすごく良い。木が裸になって景色がよく見えるようになって。だから、冬にはスキーよりも、景色を楽しみに北軽に来ればいいんじゃないかな。

それから、秋になると、カラマツの葉っぱがはらはら散って行くのがすごく印象的です。春から初夏にかけては若葉が薄い緑色で、どんどん増えていくのも魅力。四季それぞれに面白いものがあるわけだから、北軽井沢の季節は飽きないですね。

—北軽井沢の自然についてどう思いますか？

東京と比べると、空気が全然違いますね。子どものころは、赤とんぼもいっぱい種類がいて、それを取って自分の部屋に放つて遊んでいた記憶があります。自然は、まあどこでもあるんだけど、やっぱり子どもの頃から親しんでる自然だから、一番懐かしい感じがするんじゃないかな。

戦時中、全然行けない時期があったんですよ。北軽に行きたくてそのころは、夢を見ましたね。

今は夢は見ないけど、東京にいと自然に体が飢え乾くっていうのかな。一刻も早く東京を出て、カラマツ林に行きたいってね。相当痛切な飢えを感じるっていうかね。3日体が空いたら行けるって、しよっちゅう思いま

—浅間山に対する思いを教えてください。

長野県側に別荘を持っている僕の友達が自

分たちの方から見る浅間山が表浅間だって言うんですけどね。僕たちからしてみれば、絶対、北軽井沢からのほうが表浅間だと思えます。

「押し出し」は、昔、SF小説で火星人の基地だなんて書かれたから、子どものころはすごく面白くてね。今みたいにお金を取って入るんじゃないって、自由に入れたんですね。それで、ずっと上の方まで、岩に100いくつとか200いくつとかまで番号が振ってあって、それを毎年どこまで登れるかってことで、岩伝いに登って行くのがすごく楽しかったです。

—草軽電鉄についての思い出はありますか？

あれはすごくなつかしい、くねくねして酔ってばっかりいたんだけどね。ゆっくり坂を登るから、走って、飛び降りて、花を摘んで来て、また飛び乗ったりできたんですよ。それから駅で停まっただけで、雷が落ちて来て動いちゃったりするのね。あれが無くなったときは寂しかったですね…。

—北軽井沢小学校の校歌はどのような思い出で作詞されましたか？

僕の家が世話になってる土地の人を通して、北軽小学校の校歌を作ってくれて頼まれたんだよね。僕と一緒に歌を作っている、あの「さとうきび畑」っていう有名な歌を作曲した寺島尚彦も、ずっと大学村に来ていたひとりで、彼とコンビで書いてくれと言われて。やっぱり北軽井沢だから僕も寺島君もす

ごく愛着があるし、喜んで書いたっていう感じだね。

普通校歌を書くって作詞料が払われます。でも北軽の時は盆栽一鉢だったんですよ。僕もまだ若かったし、あんまり校歌を作ってたかったから、お金もらえなくてもしょうがないなって。盆栽のままじゃかわいそうだから庭に植え替えたんですよ。いつの間にか枯れちゃってさ。記憶にだけ残っているね。

—歌詞に校名が入っていないのは意識されたのですか？

あのころはあまり意識してなかったけど、ある時期から僕たちが校歌を変えていかなきゃいけないと思っただよ。校名が入るというありきたりな形をできれば崩したいなって、学校からの要求が無い限り校名を入れなくて書こうと思った。それで、北軽のときも校名を入れないで書こうと思ったんじゃないかな。学校がそれじゃ困ると言ったら校名を入れるつもりでした。

—最後に北軽井沢の魅力を教えてください。

北軽井沢はちょっとモダンなんだよね。僕はアメリカ東海岸の北の方のメイン州やロードアイランド州に行ったときに風土が良く似ていると思ったもん。だからちょっとエキゾチックなんです。イチゴじゃなくてクランベリーやいわゆる浅間ぶどうですよ。あれなんかは日本離れしているというか。北軽は、僕にとっては、日常からちょっと離れることのできる場所なんです。

たにかわ しゅんたるう 谷川 俊太郎

1931年、現・東京都に生まれる。1952年に詩集『二十億光年の孤独』でデビュー。1953年に発表された詩集『62のソネット』は北軽井沢の影響を受けている。詩の他にも作詞、絵本、翻訳と幅広い分野で活躍しており、作品は世界中で高い評価を得ている。

● 大学村とは？

自然をそのままの形で残し、大きな区画で分譲された別荘地。現在も文化人が別荘を持ち、北軽井沢を舞台に創作活動を行っている。



ゼロにする魅力

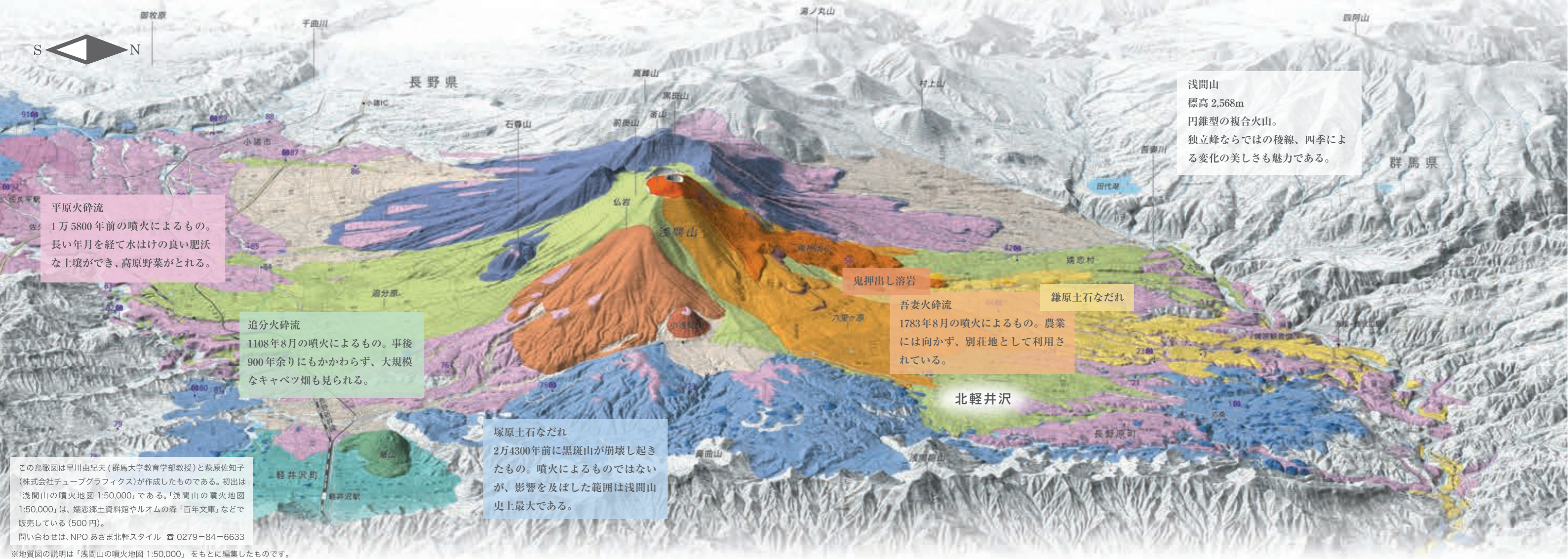
浅間山は群馬県と長野県の県境にそびえる世界有数の活火山である。1万年以上前から火山活動を始め、現在に至るまで多くの噴火を繰り返している。噴火による被害は火山灰や火山弾など様々なものがあるが、中でも山麓に多大な被害をもたらすものが火砕流である。火砕流は爆発的な噴火により発生したテフラと呼ばれる火山砕屑物と火山ガスが混ざり合い発生する。重力により山腹を下り降り、その速度は時速100kmを超え、火口からの到達距離は数十kmにまで達する。これまでも平原火砕流、追分火砕流、吾妻火砕流といった大規模火砕流が浅間山の噴火によってもたらされた。

浅間山の火口から流れ出る数百度の高温状態の火砕流は、木々を焼き、谷を埋め周囲を一瞬にして焼け野原へと変えてしまう。何万年という長い年月をかけて自然が築いてきた生態系や地形、その環境すべてがゼロに戻されるのだ。浅間山は壁の落書きをペンキで塗りつぶすかのように、いともたやすく自然そのものを白紙に戻してしまう。いいものも悪いものも浅間山がゼロに戻れば、戻らざるを得ない。浅間高原に生きるすべてのものは浅間山という圧倒的な存在に委ねられている。ゼロになるということはすべてを失うことであり、とても悲惨なことのように思える。

しかし、ゼロ点はこれまでの歴史の終わりでもあり、同時に始まりでもあるといえる。ゼロになった大地には新しい植生が生まれ、新たな森が育っていく。そしてそれはこれまでの安定した植生とは異なり、生命と生命がせめぎ合い、常に競争を続けていくような植生だ。ナラやシラカバなどといったバイオニア種と呼ばれる植物が、将来森を形成するブナやオオシラビソなどの植物の先駆けとして一生懸命生きようとする。そんな危うい変遷の中だからこそ活力にあふれ、生き生きとした森はぐくまれていくのである。浅間高原には生まれたままの若々しい自然がある。人間の営みもまた、自然とともにあり、自然に支えられることで成り立っているのだ。

浅間山に限らず日本列島は地震、津波など非常に自然災害の多い国である。私たち日本人は常に自然の脅威と背中合わせで生活している。作っては壊され、生み出しては失うということを繰り返してきた。自然災害は人々から多くのものを奪っていく。財産、命、何もかもを失ったという人も数えきれない。しかし、本当に絶望的なのはやり直そうという意志がなくなったときである。復興しようという意志を持ち続ける限り、険しい道のりかもしれないが前に進んでいくことができる。浅間高原の植物のように。浅間の自然はゼロからの一歩を踏み出す強さを私たちに教えてくれる。

塗り替えられる大地 — 浅間山 —



浅間山
標高 2,568m
円錐型の複合火山。
独立峰ならではの稜線、四季による変化の美しさも魅力である。

平原火砕流
1万5800年前の噴火によるもの。長い年月を経て水はけの良い肥沃な土壌ができ、高原野菜がとれる。

追分火砕流
1108年8月の噴火によるもの。事後900年余りにもかかわらず、大規模なキャベツ畑も見られる。

鬼押しし溶岩
吾妻火砕流
1783年8月の噴火によるもの。農業には向かず、別荘地として利用されている。

鎌原土石なだれ

塚原土石なだれ
2万4300年前に黒斑山が崩壊し起きたもの。噴火によるものではないが、影響を及ぼした範囲は浅間山史上最大である。

この鳥瞰図は早川由紀夫(群馬大学教育学部教授)と萩原佐知子(株式会社チューブグラフィクス)が作成したものである。初出は「浅間山の噴火地図 1:50,000」である。「浅間山の噴火地図 1:50,000」は、嬬恋郷土資料館やルオムの森「百年文庫」などで販売している(500円)。
問い合わせは、NPO あさま北軽スタイル ☎ 0279-84-6633

※地質図の説明は「浅間山の噴火地図 1:50,000」をもとに編集したものです。

浅間が伝える四季

司会 みなさんそれぞれどんな四季の過ごし方をしていますか？

干川さん（以下：干） 私はね、四季を通して一年の行事が決まっているの。夏は沢ガニ捕りにカブトムシ捕り、秋は栗拾い、冬はスキーだったり庭に雪を積んで滑り台作ったり。毎年それが恒例なの。夏にも別荘にきた子どもたちを連れて行くことも喜ぶのよ。それにカラマツの芽が吹く時は春が来たんだなって感じるよね。あつは60年間ここに住んでるけど毎年感動するわ。

星さん（以下：星） さすがお花を育てている人は観点が違いますね。僕は北軽に来て14年ほどですが、最近春が早くなったなって感じます。以前はなかなか春が遠い気がしてたんですけど。

干 そうだね。昔はゴールデンウィーク頃に咲いた桜も今は時期が早まって4月の後半には咲くからね。

土屋さん（以下：土） そのおかげで東京の人が遊びに来て「また桜が見れた」って喜んでくれますよ。東京では3月には咲き始めて4月後半には散っちゃいますからね。山桜などで色が違うし、魅力的ですね。新緑もきれいだし、5〜6月は色々な種類の花も咲いて良い時期ですね。

星 そうなんです。北軽は6月でも雨が少ないし、意外におすすめの季節です。夏になればトマトもナスもレタスも浅間の雪解け水を使ってるからおいしいね。

干 それは素敵ですね。冬はやっぱり浅間もきれいで、空気も澄んでるし、風景を楽しみながら、雪道散策なんて素敵ですよ。

星 冬は星もきれいですよね。薄い雲かと思つてよく見ると、それが全部星なんですよ。

浅 確かに不便なこともあるけど、北軽はそれぞれの四季のすてきな景色も楽しめます。小学校ではスケートができたし、今でも身近にウィンタースポーツが楽しめるいい所だと思います。だから浅間のふもとに生まれてよかったです。

体感できる教科書が

ここに

司会 みなさん北軽での子ども時代のお話を聞かせてください。

干 私が小学生の時は、給食の食材を大学村に取りに行つて、それを調理して給食にしたの。そういう体験を通して食材のおいしさとか大切さとかを学んだよ。

浅 学校の裏に畑があるのが当たり前だよ。秋には収穫祭をしたり。それだけ土地があつていい環境つてことだったのかな。

司会 以前小学生に書いてもらった作文に「いことがいっぱい書いてありましたね。あれは北軽を知るっていう教育の中から生まれてきているのかもしれないね。私もそう思います。大人だけじゃなくて

*一昨年、町民に配られた子どもたちの作文

暮らしの中で

体感する四季

年齢も職種も様々な4人に、暮らしとしてこそ実感する北軽の魅力を語っていただきました。



浅井 直美（あさい なおみ）
1984年生まれ。海外青年協力隊として、中米、エルサルバドルに派遣される。青少年の教育活動に携わる。帰国後はふるさとの小学校に勤務。



干川 絹枝（ほしかわ きぬえ）
1948年生まれ。クリスマスローズの切り花出荷を主体に、北軽の花作りに励む。



土屋 基樹（つちや もとぎ）
1972年生まれ。老舗地蔵川旅館の三代目店主。若手経営者として、観光協会等で活躍中。



星 勝実（ほし かつみ）
1949年生まれ。鹿島軽井沢リゾート（株）の専務取締役（総支配人）。マラソン・スキーを趣味として、地域のスポーツ振興に貢献する。



浅井さん（以下：浅） 野菜おいしいですよ。北軽に住んでみると、夏の朝の涼しい時間帯はマラソンを楽しんだり、暑い昼間は木陰で本を読んだりしてリゾートで過ごすような、リッチな気分を味わうことができますよ。

星 そうそう。ちなみに僕はマラソンが趣味なんですけど、季節によって浅間の景色の見え方が全然違っているといます。

浅 確かに浅間の景色で、季節の移り変わりを感ずすよね。

一度きりの夕焼け

司会 それでは秋から冬にかけてはいかがですか？

土 秋は紅葉がきれいだけども寒くなるから驚いちゃうね。

干 そうなのよ。秋は特に夕日がすごくきれいに見えるの。同じ景色は一回もないし。本当に紅葉きれいですよ。

干 山が上から紅葉してくるの。畑からだんだんと色が変わっていくのが見えるのよ。秋は山から、春は里からつてね。そうやって紅葉を楽しんでるとすぐ冬がやってくるのよ。

星 けど、冬にもたくさん北軽ならではの良さがあるよね。もともと北軽の冬は閑散期だと思つて、雪はパウダースノーなんです。それを生かして私の経営するリゾートではスキーやスノーボードだけでなく雪道の散策も取り入れてます。

土 私は北軽小学校の校歌がすごくいいと思います。覚えやすく北軽の子どもを「浅間っ子」ってフレーズで例えてね。そのフレーズの通りに、自然との関わりは密着していると思います。川に行ったり、大学村に行ったり教科書そのものがここにはあるんじゃないかなって。

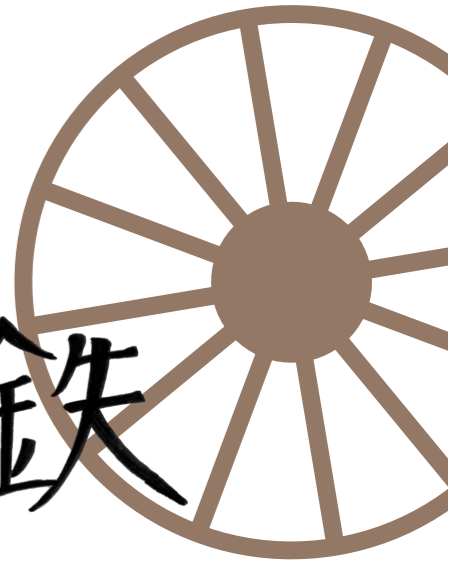
干 子供だけじゃなくて別荘に来た人に北軽の良さを体験してもらえように私は貸農園もやってるよ。それをきっかけに別荘の外に出てみたり土いじりしたり、いろいろ体験できるからね。

土 貸農園はいいきっかけになりますね。別荘の中だけじゃなくて、一歩踏み出して地域の方と触れ合つてみるのはお互い大切ですよ。

浅 北軽でしかできない体験もありますしね。酪農を見て、大学村で森林浴して、畑を見て……。北軽のいいところをたくさん体感してほしいです。

司会 体で感じる四季。町のほうならお歳暮の時期とかが四季を感じる機会になってしまふけど、北軽は嫌でも体で感じますね。そんな四季があるから野菜もおいしく育つし、まっすぐに子供も育つ。それが北軽の魅力ですね。

司会：ミュージックホールサポーターズ代表 神倉 裕さん



北軽井沢とともに歩む

草軽電鉄

草津と軽井沢をつなぐために

新軽井沢から草津温泉間を結んだ草津軽便鉄道が誕生したのは、大正4年（1915年）。その目的は草津温泉をはじめ沿線の旅客輸送とともに、物資及び木材、薪炭、硫黄などの貨物を輸送し、地域の発展に努めることだった。山中を横切らなくてはならなかったため、スイスの登山鉄道を参考にした工夫を多く凝らしていた。



▶当時の姿のまま残されている「北軽井沢」駅舎。2006年の改修工事で鮮やかな色も再現された。

開業時は新軽井沢・小瀬（後の小瀬温泉）までだったが、順次草津まで路線を延長し、蒸気機関車から電気機関車へと切り替えた。大正15年（1926年）には、全長55.5kmの全線が開通し、片道約3時間半をかけて走った。現在、この間を自動車で移動すると約1時間なので、決して早い移動手段とは言えなかったが、道路の整備も進んでいない当時、重要なライフラインとして生活に浸透していた。新軽井沢・草津間には約22の駅が設けられ、そのうちの一つが「北軽井沢駅」だった。

草軽電鉄と北軽井沢駅

草軽電鉄を利用して北軽井沢に来るのは夏に避暑地を求めて来る人が多かったようだ。大学村と呼ばれる識者が集う別荘地帯やキャンプ場が付近に多くあるため、若者の集団、子ども連れなど様々な人たちが訪れていた。

しかし、北軽井沢に人が集まるのは夏だけではない。北軽井沢には照月湖という周囲の地域の湖より凍り出すのが早い湖があったため、冬にはスケートをする人たちが集まった。スケート客は若者が中心で、学生が合宿と称して団体で訪れていた。春には国境平という駅から浅間山への道に咲く色鮮やかな鬼つつじの群落を見るための花見客でにぎわった。

このように春夏秋冬問わず人を引き付けた北軽井沢は、新軽井沢・草津間で最も乗降者が多い駅だった。また、草軽電鉄は日本の映



◀アメリカの会社が鉱山用に製造した車両を改良した電気機関車の当時の様子。「カブトムシ」の愛称で親しまれている。（右）2010年7月北軽井沢駅舎に登場したその機関車の実物大木製モニュメント。（左）



画作品にも数多く登場する。日本初のオールカラー作品『カルメン故郷に帰る』は、北軽井沢駅、浅間牧場を中心に撮影された作品だ。主人公のカルメンが東京から帰って来た時に列車から降り立つのが北軽井沢駅だった。

人々に愛されながら

このように当時、大変注目を浴びていた草軽電鉄だが、徐々に経営が傾いていく。その主な要因は他の輸送方法の発展と台風。道路の整備が進むと同時に自動車の普及、バスの大型化なども進み、鉄道の利用者が減り、維持費もままならなくなった。その状況は「1円を稼ぐのに100円かかった」と言われるほど。それに追い打ちをかけたのが昭和24年

のキティ台風、翌年のヘリン台風だ。吾妻川橋梁が流失するなど、甚大な被害をうけた。そして昭和34年の台風7号が原因で再び吾妻川橋梁が流失。一部が不通となる。その後、橋梁は復旧されることなく、部分的に廃止が決定。このことが引き金となり、各区間の廃止が続々と決まってしまう。地元自治体などの存続運動も続けられていたが、昭和37年（1962年）、上州三原・草津温泉間が廃止となり、全線が廃止になった。

新たな役目

廃線後、ほとんどみすぼらしく廃れていく北軽井沢駅舎を守ろうと元駅員の黒岩謙さんは立ち上がった。黒岩さんの手によって形を変えることなく残された駅舎は平成13年に長野原町に移管される。そして平成17年、長野原町は旧草軽電鉄や北軽井沢の歴史を後世に伝えようと、駅舎の改修工事を実施し、その保存に努めた。

北軽井沢駅舎はその土地を知る上で重要な建物であり、また広く親しまれている。そのため「国土の歴史的景観に寄与しているもの」に該当すると考えられ、平成18年11月29日、国の登録有形文化財の指定を受けた。

現在駅舎は、文化財の活用という観点から一般に開放され、北軽井沢に関係のある様々な展示などに使われている。また、駅舎のすぐ近くに北軽井沢ふるさと館が建てられ、この付近はまさに北軽観光の中心となっている。

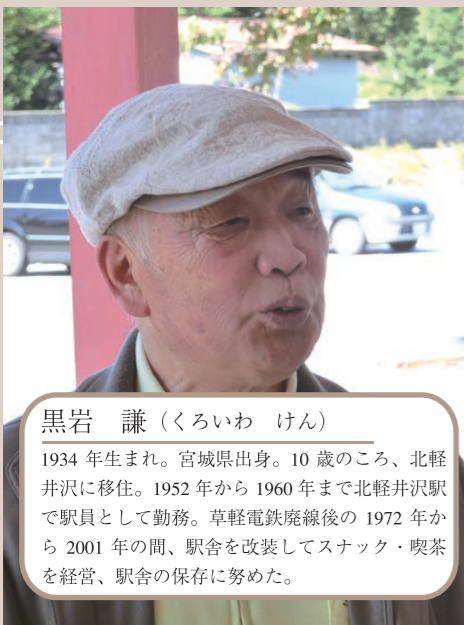
インタビュー

北軽井沢駅舎はなぜ今でも廃れずに残されているのか、その保存に尽力してきた元北軽井沢駅員・黒岩謙さんにお話を伺った。

— 駅員として働いていた当時は。
昭和27年から35年までここで駅員として勤めていたんだけど、当時はすごいにぎわいで、道路が整備されていない時代、北軽に来る方法がこれぐらいしかなかったから、夏には観光客や別荘を持つてくる人で客車がいっぱいになったね。毎年来てくれる人もいて、「また来たよ」「来年もまた来るね」なんて声をかけられるとすごい嬉しかった。指揮者の小沢征爾さんも別荘があったから何度も見かけたね。

— どのような仕事をされていましたか。
駅に関する事は運転以外なら何でもやっただよ、出札をしたり改札をしたり。本当は5年くらい駅員をやると次は軽井沢で車掌になれるんです。でも、家族がいたから遠くには行かない方がいいってことで、北軽井沢駅でずっと駅員としてやってました。

— 廃線になってからは。
希望する者は他の路線に異動できたんですよ。実際、何人かはそっちに行っちゃったけど私は行きませんでした。自分がここにいたかったし、駅を残すっていうのをライフワークだと思っちゃ



黒岩 謙（くろいわ けん）

1934年生まれ。宮城県出身。10歳のころ、北軽井沢に移住。1952年から1960年まで北軽井沢駅で駅員として勤務。草軽電鉄廃線後の1972年から2001年の間、駅舎を改装してスナック・喫茶を経営、駅舎の保存に努めた。

— スナックと喫茶をやめてからは。
駅舎を草軽の本社に返すって言ったら、長野原の町の方に観光の中心として買ってもらってくれて。だから駅舎の姿に戻すのも町がやってね。外装の色も当時とほとんど同じ色に塗りなおしてもらいました。駅舎のすぐ前にある線路は再現されたもので、当時の物よりだいたいぶ立派になっちゃったけど位置なんかはそのまま。最近では当時の列車を再現した木製の模型も作られたから北軽井沢に来た人にはぜひ見てもらいたいね。

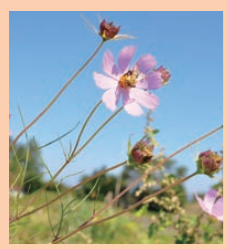


若手の中に 息づく北軽

北軽井沢には20代30代の頑張っている若手がたくさんいます。岩田さんの北軽の今と真摯に向き合う姿から、豊かな自然と共に成長したことで人柄も豊かになったのではないかと気付かされた。北軽には四季であふれる豊かな自然とそこに住む人の魅力があった。



岩田修一 1980年生まれ 北軽井沢出身
高校卒業後、東京・多摩にある農林水産省管轄の農業者大学校で3年間大学生活を送る。その間千葉県や石川県で農業研修を受けるだけでなく、ドイツやフランスなどで積極的に海外の研修にも参加。22歳の時に北軽井沢に戻り、農業を続けて9年目になる。



グローバルな農業形態

元々は、家が酪農家で乳搾りをやっていました。しかし、そのままの形で継ぐことに疑問を感じ、東京に出ました。

大学在学中に、他県の農業形態を見たり、海外に研修に行ったりしたことが、今の形態に大きく関係しています。人間的なところで、うちは日本全国だけでなくネパールやアメリカなどから仕事にきています。北軽井沢は寒い地域なので、夏中心の仕事になり、インターネットでアルバイトを募集したためです。前のバイトの人や、大学時代の知り合いからの紹介でバイトにきている人もいます。一緒に仕事をして、一緒にご飯を食べる中で、自分が自分にとって財産になっています。

農業という大家族経営が多いので、閉鎖的なイメージだと思います。しかし、ここは開拓地なので、誰でも受け入れる構えがあり、いろんな人が入ってくるよっていいのがありますね。

岩田さんは大学時代に日本にとどまらず海外にまで活動を広げ、色々な視点を取り入れる。人生の疑問に向かい合い、答えを見つけようとこまめにバイタリティー豊かに動いた結果が、生き生きと農業について語る岩田さんの表情にあらわれている。

人とのコミュニケーションを大切にすることは、当たり前すぎて普段意識することがない「人は支え合って生きている」ということを再認識させる。

今に満足せず

新しい価値を生み出す

減農薬などの無駄な肥料を入れないために土壌分析をするといった、環境を汚さない農業をやるという取り組みを9年間続けてきました。

昨年大震災が起きて、農業などはまったく関係ない放射能と言うあまりに個人とかけ離れた問題で、東日本や群馬県産の野菜は食べられないと簡単に切り捨てられてしまいました。検査で安全性は保証してきましたが、安心してもらうためにはさらなる努力が必要です。やはりこれからの若い世代が新しい価値を生み出していかなければいけないと思うんですよ。

実際に、昔から熱心に太陽光発電を取り入れている方や販売方法を工夫している方がいらしたりして、農業ってそういう意味ではもっと可能性がある職業だと思ってます。

取材中に出た「目標は常に上を見ていかないといけない」という言葉。それは、岩田さん自身人生の中で何度も繰り返し言い続けてきた言葉であり、取材を通して見えてきた岩田さん像そのものというような言葉だった。

厳しい現実には囚われることなく、向上していこうとする姿は、未来の農業を明るくしてくれらると確信させてくれた。



北軽でみつけ 二人でつくる 自由な暮らし スロ-ライフ

—移住したきっかけは？

いちばんは東京に住みづらかったことです。というよりも都会に自分が合わせられないというか。人が大勢いることが合わなかったです。それに都会には時間の感覚がない。北軽みたいに夜になれば、真っ暗になったり、四季の変化を目で見たりはできません。やっぱり東京にいて、たった2年間でも季節の感覚が鈍ってしまったように感じますね。移住したのはそういう思いからです。それに小さいころから北軽には来ていて、北軽が好きだったし、ずっと東京にいてもないだろうと思って。じゃあ気持ち良さそうだし移っちゃおうかって気持ちで深く考えずに、仕事もスパッとやめて来ました。

—北軽のイメージは？

来るときには北軽のことをそんなに知らなくて。だから引越す前のイメージは何もない場所というイメージでした。でもかえってそういうところも面白そうと思ってました。だから自分たちで家を作ったり、隣に本屋さんを作ったり。都会で便利なんでも揃っているよりは何かない場所で自分たちの好きにできるほうが楽しいですね。

—北軽の四季はどうですか？

季節が移る時の混在してる時季が北軽では楽しめます。特に冬から春が一番好きです。もう永遠に春が来ないかと思って、半分冬眠しかけて、もうだめだと思った時にちょっと



藤野 由貴夫 (ふじの ゆきお)

1975年生まれ。福島県出身。福島～仙台～東京でいくつかの職を経験したのち、2004年北軽井沢へ移住。2006年「麦小舎」をオープン。その後、カフェと並行して平日は大屋原地区の農園を手伝っている。2010年からは、カフェ隣接の小屋で古本の販売も始める。

幼いころから慣れ親しんでいた北軽に、東京から移住してきた藤野夫妻。二人が好きな本とやりたかった喫茶店を組み合わせたブックカフェ「麦小舎」をオープンして6年が経ちます。自分が思い描く自由な暮らしは北軽の魅力のひとつです。

—二人の現在の生活は？

ブックカフェというか、本とコーヒーでゆっくりしてもらおうというコンセプトでお店をやっています。もうけを出すというよりも、まつたりとここで過ごしてもらいたいという思いですね。食事は本を読みながらでも食べられる軽食感覚のメニューを出しています。今はハンバーガーを作っています。コーヒー

や食事のこだわりよりは、場所として、空間として、本を読んでゆっくりしてもらいたいですね。そういう場所が欲しいと思ったので、自分たちの欲しい空間を作っています。あとは人が集まってきて、知り合い仲良くなったりして、そういう「人のふれあい」が生まれる場所を作りたいです。

もともと二人とも本好きで、喫茶店をやりたいって思っていたんです。この辺で気軽に、静かにコーヒーが飲めるところが少ないし、本を売っている場所も少ないので、じゃあやろうかという感じです。自分たちの好きなものと北軽にないものを絡めて、自分たちで作っちゃえってね。



雪が解けて、緑が見えはじめると、やっとなり越えたっていう感じがします。どの季節が来る時もしっかりしてわかったので、東京みたいに気が付いたら季節が変わって、ということは無くて、来るときは全部がガツンと来ますね。

夏はにぎやかですけど、ほんとに夏より春や秋のほうが気持ちいですね。でも意外に冬も景色や空気がきれいです。パリーンとして、真っ白で。

—今の生活の忙しさはありますか？

東京での忙しさと同じでの忙しさは全然違います。北軽も忙しい時は大変ですけど、でも心がぐったりしちゃうような感じではないです。

ですね。完全に肉体が疲れて寝てしまうことはあるんですけど、引きずる感じではないです。また明日もやろうっていう感じの忙しさ。落ち込むような感じではなく、いい疲れです。

—今後の目標はありますか？

引越してきた時から基本的に何も考えずに生活していて、この先をどうするかとかもやっぱり考えてないですね。その時にやりたいことがあればやるとい感じですね。しばらくはこのまま自由にいきますね。それが北軽のいいところなのか。自分たちのような人たちが多い場所なので、そういう人が周りにいるから自分たちもこうやって暮らしていきます。そして次の目標をいうなら、新しい本屋さんをどこかに作ることでいいかな。



藤野 麻子 (ふじの あさこ)

1973年生まれ。東京都出身。幼いころから家族で頻繁に北軽井沢を訪ねる。東京や福島に暮らした後、2004年北軽井沢に移住。夫と共に週末はカフェをオープンさせる傍ら、地方誌の編集、ライター業などを行っている。また、地方をテーマにしたリトルプレス(小冊子)の制作に携わる。



手作りの麦小舎看板。描かれているのは藤野さんの飼っている猫のおぎちゃんです。



冬はもう、氷点下まで下がるそうです。こたつとこの暖炉が寒い冬の味方です。外には薪もありました。



店内です。大きな木のテーブルがあります。可愛い小物もたくさんあり、写真には収まりきれないくらいです。



ブックカフェということ、店内にもたくさんの本があります。飾ってある本はおすすめの本だそうです。



テラスです。暑い日には木陰が気持ちよく、寒い日には日差しが暖かいそうです。緑にあふれていて景色もきれいでした。



カフェの隣にある手作りの本屋さん。本は東京などから競りて仕入れています。



今年から飼いだめたというももちゃん。すごく人懐っこくて、かわいいです。猫に続くお店のアイドルです。



麦小舎はお二人の雰囲気の良さが伝わる、ブックカフェです。北軽には自分で見つけるスロ-ライフがあります。

浅間っ子

自然と共生して育つ

熱い絆で受け継ぐ伝統

「やはり、北軽は広大な自然に囲まれていて、夏は特に素晴らしい。また、学校のためなら...と、学校側の言うことを尊重してくれ声を掛けてくれる心の優しい方が多い。」北軽井沢小学校に二度目の赴任の高橋校長は、北軽の魅力について熱く語ってくれた。

高橋先生は、30年ぶりにここ北軽井沢小学校に二度目赴任してきて、当時保護者だった方が地域の役員さんや、区長さんなどになっていて高橋先生のことを忘れずにいてくれるのが印象的だったという。30年経っても変わることのない地域の熱い絆と、温かさがうかがえる。さらに、親同士の結びつきが強くPTAの活動が盛んだ。学校に対して非常に協力的で、それが昔からの伝統になっている。自分の仕事よりも、子どもたちのために時間を割いてくれるのだ。子どもたちと一緒に遊んだり、どこかに見学に行ったり、一緒に給食を食べたりなどの各学級で行われているイベントは、ほとんどの保護者の方が一緒に来てくれるという。

また、北軽井沢小学校では浅間山が近いので、保護者やボランティアの方々を呼んで噴火を想定した子ども引き渡しの訓練や、炊き出しの訓練が二年に一度行われている。地域が一つにまとまっているからこそ成り立つ活動だ。この地域の強い結びつきや、心優しい周りの方々の連携によって北軽の良き伝統

が受け継がれているのだ。さらに、北軽の魅力は野菜を作っている人や、別荘に来てくれる人がいて、と一つの色に染まっていなくても、観光として北軽に足を運んでくれる人でも、北軽の地は誰でも温かく迎え入れてくれる。

すぐ傍にある四季

北軽の四季の移り変わりは、一目見て分かるほどはつきりしている。春は、ほかの地域よりも北軽の地では芽吹くのが遅いため、満開になっている。夏はとても鮮やかな緑の木々たちが生き生きとそびえている。秋は一斉に紅葉が始まり、深い味わいが感じられる。冬は北軽独特のパウダースノーが降り積もる。パウダースノーは通常の雪と違って、サラサラとしているので固まらないという特徴を持つ。さらに、雪の降り積もった浅間山も魅力の一つである。

このような変化をとげる地の中にある北軽井沢小学校も、四季に応じて工夫している面がある。北軽井沢小学校の校門から入ってきたところには、スケートリンクがある。一周80メートル、冬になると氷が張られるが、夏はスポーツ少年団のローラースケート場として使用されている。遠くに行かなくてもできる！すぐに行ける！という利便性が魅力的であり、地域柄がとてよく顕われている。ローラースケート場とスケート場を兼ね合わせたこの場所は、北軽井沢小学校の地域の特色の一つである。

北軽で育む三つの土台

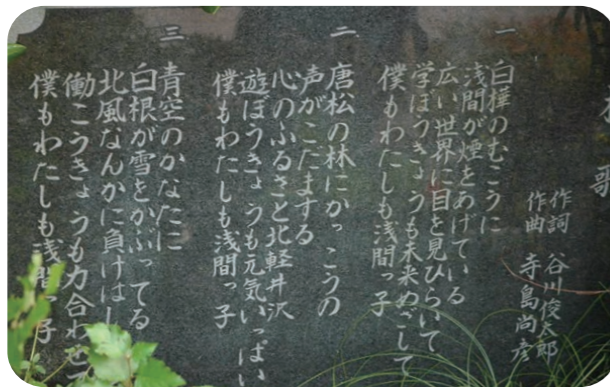
北軽井沢小学校の校歌の中に、よく学び、よく遊び、よく働く、というフレーズがある。これは谷川俊太郎さんが作詞したもので、この歌詞の部分が北軽井沢小学校の目標になった。まさに、知徳体のようなバランスのとれた目標で教育の基礎となっている。30年前くらいにこの目標になり、歌っているときも北軽の情景がすぐ頭に浮かんでくるような歌だ。これまで高橋先生は多くの小・中学校に勤務してきたが、一番覚えやすく、分かりやすく情景に合っている校歌だという。子どもたちも、すぐに歌詞を覚えて元気よく歌っている。分かりやすいと保護者の方にも評判の良い校歌である。高橋先生が30年ぶりに赴任してきてすぐに歌えるようになったほど、北軽井沢小学校の校歌はインパクトが強いのだ。

また、他の学校は校歌の最後に学校名を何回も入れるところが多く見られる。だが、ここ北軽井沢小学校は違う。学校名の代わりに浅間っ子という単語を繰り返すことで、どこか馴染み深いような感じが感じられる。「北軽井沢小学校では、この素晴らしい校歌に基づいて、子どもたちにこれからの土台作りをしています。何かはすぐれているけど、何かの部分では大して興味を示さないとか、勉強だけではなくて、やはり学ぶ、遊ぶ、働くというこの三つが大切なのです。この三つの土台

をしっかりとさせることが、北軽井沢小学校の使命だと思います。」高橋先生は温かい眼差しでこう語ってくれた。

そして、子どもたちが自然と、自然を受け入れて親しめるところが、ここ北軽だからこそできる教育なのだ。この広大な自然を特別に意識することなく、自然と一体になってもに生きている。

北軽井沢小学校は愛鳥の指定校にもなっていて、意識せずとも子どもたちが常に鳥の声を聞いている。こういった環境から受ける影響はとても大きい。「この恵まれた自然環境にあるので、そういう自然を大切にし、心豊かな子どもたちに育ってほしい。」と、高橋先生は子どもたちの未来に希望を膨らませている。



← 谷川俊太郎さん作詞の校歌。校長室の中には谷川さんに直筆していただいた用紙がある。覚えやすいと評判の校歌で、生徒達も元気よく歌っている。



北軽井沢小学校のスケートリンク兼 → ローラースケート場。季節によって2つの顔を見せるこの場所で子どもたちは生き生きと遊んでいる。

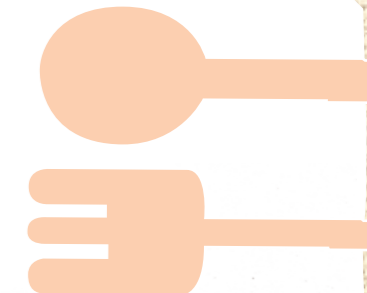


また、他の学校は校歌の最後に学校名を何回も入れるところが多く見られる。だが、ここ北軽井沢小学校は違う。学校名の代わりに浅間っ子という単語を繰り返すことで、どこか馴染み深いような感じが感じられる。「北軽井沢小学校では、この素晴らしい校歌に基づいて、子どもたちにこれからの土台作りをしています。何かはすぐれているけど、何かの部分では大して興味を示さないとか、勉強だけではなくて、やはり学ぶ、遊ぶ、働くというこの三つが大切なのです。この三つの土台



高橋 通泰 (たかはし みちやす)
1958年生まれ。吾妻郡東吾妻町在住。教師になって最初に赴任したのが北軽井沢小学校だった。それから多くの小・中学校を移動し、30年後に校長として再び北軽井沢小学校に戻る。





北軽の魅力がたっぷりつまった まぼろしの北軽井沢駅弁

おにぎり
色合いで浅間山の
四季を表現。

秋を玄米で表現。
野菜漬け入り。
夏の青々しさをよもぎで
表現。花豆入り。
冬の雪の白さを白米で
表現。ねぎ味噌入り。



デザート
カスタードクリーム
きんぴら
枕木をイメージ。
ピクルス
じゃが焼き
切符をイメージ。
チーズ入り
ロールカツ
こんにゃく
電車の車輪をイ
メージ。ニンジンで
細かく表現。
シイタケ入り
卵焼き

「ぐんまの物語弁当コンテスト2011
自然・伝承・文化編」の優秀賞（JR東日本
高崎支社賞）に「まぼろしの北軽井沢駅弁」
が選ばれた。作ったのは、北軽井沢NSP。昭
和35年に廃線になった「草軽電鉄」での旅路
で食べる駅弁をイメージした、色鮮やかなお
弁当だ。第2回北軽井沢わくわくフェスタで
は「まぼろしの北軽井沢駅弁」をすべて手作
りで、50食限定で販売した。3人の何気ない
言葉の中から、北軽の魅力を見出すこと
ができた。

”ただ一日遊びに来ただけじゃ
感じられない四季を
どうしても教えたい。”

「まぼろしの北軽井沢駅弁」には4種類の
おにぎりが入っている。お米の種類を変えて
4色にすることで、浅間山の四季の移り変わ
りを表現しているのだ。

「ここに住んでてまず目にするのは、浅間
山じゃないですか。私なんかは特に遠くから
お嫁に来てるんで、以前は四季っていうもの
をあまり感じられていなかったんです。でも、
ここに一年間住むと、四季っていうのを肌で
感じるんですよ。新緑だったりとか、冬の真っ
白山山肌とか、紅葉とかね。」と、萩原さん。
日々移り変わっていく北軽の景色や、1年を
通して感じる四季の魅力を、どうしても伝え
たかった、と目を大きくして言う3人から、
北軽への熱い思いが伝わってきた。

”野菜の緑がすつきり
しているような気がする。”

「春の新緑が良いよね。おいしそうな葉っ
ぱがいっぱい。萌えるって、ああいうことな
んだらうね。」と五十嵐さん。お嫁に来るな
ら春からが良い、と3人は口を揃えた。避暑
地として夏に訪れる人が多い北軽だが、春が
隠れた魅力なのだという。北軽は、ゴールデ
ンウィーク前後の約一週間で、あたり一面が
緑の世界へと景色を変える。そして夏が過ぎ、
秋にはセピア色に、冬には雪で真っ白になる。
それらの景色の移り変わりと同時に、におい
も変わっていくのだという。すつきりとした
野菜の緑、緑から熟していくトマトの赤、徐々
に濃くなるとうもろこしの黄色、自然がかも
し出す色鮮やかな変化を、北軽の1年では全
身で感じるができるのだ。



五十嵐尚子
1969年生まれ。
嬭恋村出身。2男の母。
萩原祥子
1969年生まれ。神奈川県
相模原出身。2男1女の母。
高井弘子
1970年生まれ。
吾妻村出身。2男1女の母。

北軽井沢 NSP
長野原町在住の主婦3人。それぞれ一番上のお子さんが同級生。第1回北軽井
沢わくわくフェスタで開催された「北軽グルメレシピコンテスト—スープの部」
に出場したことがきっかけで3人で集まって料理をするようになった。

”子どもたちから学んだ北軽

3人がお弁当に詰めた北軽の魅力のほとん
どは、子どもたちを通して知ったものなのだ
という。北軽の小学校では地元を題材にして
調べ学習をすることが多く、学習発表会では
毎年6年生が草軽電鉄について調べて発表す
るそう。それらの話を聞いて、浅間山や草軽
電鉄、さらには地元の野菜、開拓の話を知っ
ていったのだという。

「子どもにくつついて6年間過すと、北
軽のことはある程度のことわかるよね。」
「教わったんだよね、子どもに。素敵よね。」
「お弁当にするモチーフにもってこいだよ
ね。」
と3人は話した。お弁当から溢れ出す魅力の
原点は、子どもたちにあった。

”ものすごく良い子に
育ってました。”

北軽の子育てについて尋ねると、3人から
は優しい言葉ばかりが溢れた。
「楽しいよ。すごく自然と近くなって。子ども
らしいのかな？」（萩原さん）
「普通に育てたつもりでも、他の地域の子に
比べたらものすごく良い子に育ってました
ね。大きくなって、高校生になって、出てい
くじゃないですか。良い子だな、この子はっ
て思っていましたね。飛び抜けて良い子じゃな
い。良かったのって。合ってるでしょ。」（高
井さん）

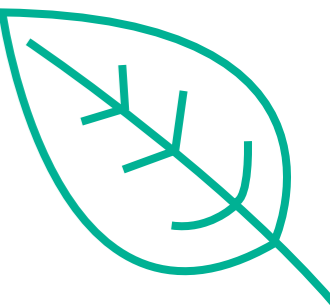
「すごく素直だね。」（萩原さん）
「だってそうじゃない。15歳まで毒されてな
いんだもの。こういうところで育てればそ
りゃあもう。」（五十嵐さん）

「北軽小学校の目標は働くが付くんですよ。
よく学び、よく遊び、よく働く浅間っ子。お
家のお手伝いをしなさいっていう。だからす
ごく良い子なんですよね。」（萩原さ
ん）

「子どもがラジオ体操に来ないと、
ああまたお母さん腰痛くなっ
ちゃったの。その子がラジオ体操に
来ないだけで、お母さんの代わ
りに畑に出てるってわかるの。
繋がってるから。それくらい子
どもは、親に何かあれば手伝
いをしますよね。」（高井さん）

「あと鳥とかも植物とかもよく知ってる。」
（萩原さん）
「自然にはよく触れてるよね。」（五十嵐
さん）
「すごく素直に、まっすぐ育ちますよ
ね。」（萩原さん）
「まっすぐ育つー本当に。これやって
いけるかなって思うくらい。」（高井さん）

これらの言葉の中に、北軽で育った子ども
たちに対する特別な自信を感じた。北軽にあ
ふれる自然が、常に人々を近くで包み込み、
子どもたちを育てているのだ。そんな北軽の
暮らしの魅力がぎゅっと詰め込まれたものが
「まぼろしの北軽井沢駅弁」だ。



季節をまとい 空へのびる

ツリーハウス

北軽井沢に入ると別荘やキャンプ場などで「木でできた建物」が多く見られる。中でも木の上に建てられている「ツリーハウス」には目を惹かれる。稲垣さんはそれらツリーハウスやログハウスの製作者だ。

ツリーハウスから眺める季節

稲垣さんにツリーハウスの作り方を教わっていると、ツリーハウスを作っている稲垣さんでなければ語れない四季の良さが見えてくる。

意外なことにツリーハウスを作るのは冬なのだという。もちろん北軽井沢の冬は雪が降り、寒い。しかし、辺り一帯雪で覆われた世界と冬の空一面に輝く星は美しく、また春になったら木々からどのように葉が生えてくるかを想像しながらツリーハウスを形にしていくなかで楽しいと言っていた。そして春になり、木々が葉をつけた中にあるツリーハウスが、想像しているものを超える出来になった時が喜びであるという。想像とは違う出来になることもあるが、それもまた自然を感じることができて楽しいと言っていた。また、夏になると春の時とは全く異なった緑の葉になり、一味違った雰囲気味わえることや、秋に紅葉で様々な色に色づいた葉の中にあるツリーハウスを見ることが木の実を採り食べること。稲垣さんはツリーハウス作りとともに北軽井沢の自然や四季も合わせて楽しんでいるのだと強く伝わってきた。



自然を生かし自然と融合

「ツリーハウスといっても木を加工して人が作る人工物。その人工物と自然をいかに融合させるかを考えている」と言う稲垣さんがとても印象的だった。また人工物と自然物だけでなく、アウトドアとインドアの融合も考えているという。例えば遊具などの人工物もどこにでもある金属のものではなくて木を使って遊具を作ることと自然と一体化させたり、キャンプ場では外で行う焚き火をログハウス内で行えるようにしている。他にも、木の成長や季節に合わせてツリーハウスを増築させるなど環境の変化に合わせて手を加えている。

で、屋根を作るときも直線に作れば簡単にできるところをあえて曲線な木々の良さを生かして自然と融合させていると言う。

木も子どもも成長

「今の子どもはテレビゲームなどの仮想体験が主になっているが、僕は実体験をさせてあげたい」と稲垣さんは言う。子どもたちにツリーハウスを通して自然に触れて欲しいと考えているのだ。ツリーハウスを作る時も子どもを集めて木の加工を手伝ってもらうことがある。普段の生活では味わうことのできない



ニレやクリ、もみじなどの腐りにくい木を使用し、安全面を強化している。

増築するために、完全にはふさがず、つなぐことができるよう、遊び心のある作りになっている。

木の幹に直接ボルトを打ち込んで木をできるだけ傷めないような作りに。

画：稲垣 豊



非日常を体験する場を用意し、子どもたちに自然そのものを体験させているのだ。子どもがツリーハウスで遊ぶ時の安全性にもとても気を使っていた。腐りにくい木を使用したり、あえて木に木材をきつく固定せずに風で動くようにしたりしている。さらに木の負担を減らし、成長を止めてしまわないように木と木材との固定方法などにも配慮されていた。「ツリーハウスは子どもが初めて完成する」と言う稲垣さんは、木も子どもも共に成長していけるようにツリーハウスを作っているのだ。

自然とともに暮らし、自然を楽しむことを知っている稲垣さん。四季を感じながら自分の好きなツリーハウスを作っている稲垣さんは生き生きとしていた。「ツリーハウスを北軽井沢に訪れるきっかけにしたい」それはツリーハウスと北軽井沢がどちらも好きだからこその思いであった。



いながき ゆたか
稲垣 豊

1968年生まれ。名古屋育ち。アウトドアクリエイター。東京の美大で日本画を学ぶ。大学4年のときに合掌造りに触れ、木への興味を深め、婦恋でログハウスビルダーになる。さらに自分のやりたいことを追い求めてキャンプ場でログハウスや別荘を作っていたら、それが楽しくなり、北軽井沢でツリーハウスやログハウスを作り始める。

わくわくフェスタの実行委員として活動した新井さん。「もともと北軽井沢コンソーシアム協議会からスタートしたんです。北軽の何か所かにある、丸太を積み重ねたサインをデザインしたのも活動のひとつなんです。あれは私たちが考えたんですよ。そういった活動の中で、地元の人たちをひとつにまとめてお祭りをしようということでもわくわくフェスタは始まったんです。話し合う中で、地域活性化のために観光と農業を仲良くさせられたらいいなって。北軽の観光と農業って、それぞれはともいものだから、わくわくフェスタでふたつをくっつけて観光の農業ができれば、みんなひとつになっていけるかなと思っただけです。今年は今までのメニューに加えて、ミニ電車を動かして

新井光 (あらいひかる)

1955 年生まれ。北軽井沢在住。有限会社光建築工房の代表取締役。一級建築士の資格を持ち、草軽電鉄で使用されていた機関車の復元という夢を果たす。



昔の北軽のイメージを残しました。わくわくフェスタはまず地元の人たちが楽しめるお祭りになりたいんです。どこのお祭りも自分たちが楽しめるお祭りは長続きしないからね。」



モ〜ッと観光を盛り上げよう！わくわく！！

第2回わくわくフェスタ

今年も多くの人でにぎわい、活気をみせたわくわくフェスタ。そこにはたくさんの思いが込められていました。当日の様子をちょこっとだけ紹介します。



1 入り口ゲート。手作り感たっぷり！ 2 メインステージでの牛乳早飲み大会。 3 メインステージにはたくさんの観客が。 4 乳しぼり体験。お乳がいっぱい出るー！ 5 とってもかわいいジャージー牛！ 6 かつて親しまれていた草軽電鉄をミニサイズで再現。子どもたちを乗せて走ります。 7 テントで売られていた『まほろしの北軽井沢駅弁』。詳しくは P.18 へ！！ 8 同じくテントではコロケを販売。中にはきたかる名物『花豆』が入っています。何と形が♡♡♡ 9 ポニー乗馬体験。子どもたちも楽しそう！ 10 ポニーには餌やりもできます。 11 熱気球体験。空から見る北軽の自然は圧巻です。

編集後記

本誌を作るにあたって北軽井沢を訪れた私たちが、浅間山を中心とした雄大な自然、そこで生活する人々、すべてが迎えてくれました。しかし、自然はいつでも優しいわけではありません。時には浅間山の噴火のようにすべてを破壊することがあります。それでも、浅間山のみもとで生き生きと生活する人々を見て、人間は何度でも立ち上がる力を持っているのだと感じました。

昨年の3月には東日本大震災が起き、北軽井沢でも被害がありました。今でも放射能の危険にさらされ、農業や酪農などは厳しい規制の下に置かれています。それでも北軽井沢の人々は、日々を力強く生きています。私たちも、震災から目をそらさずしっかりと向き合っただけでなく、北軽井沢「じねんびと」のメンバーをはじめ、協力して下さった北軽井沢の方々、そのほか「きたかる」制作に関わったすべての方々の力があつたからです。ありがとうございました。

今回、本誌を完成させることができたのは私たちの力だけではなく、北軽井沢「じねんびと」のメンバーをはじめ、協力して下さった北軽井沢の方々、そのほか「きたかる」制作に関わったすべての方々の力があつたからです。ありがとうございました。

編集長 中村拓実

これは、群馬大学の平成23年度地域貢献事業によるものです。

発行 群馬大学社会情報学部地域社会学研究室

企画・編集・制作 群馬大学社会情報学部「きたかる」編集部

STAFF
編集長：中村拓実
副編集長：小林悠人
富川亮敏、飯塚悠、岩崎栄里、唐澤莉奈、小池佐季
斎藤悠莉、笹木麻美、松木梓、横山莉果子

SPECIAL THANKS
北軽井沢「じねんびと」の方々
中村ひろみさん
取材にご協力していただいた方々

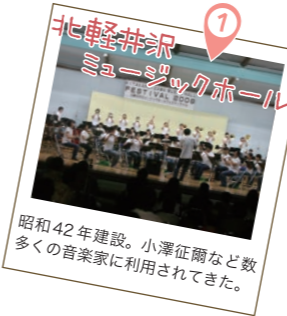
◇本誌記事・写真・イラスト等の無断転載を禁じます。

きたがる

群馬県・北軽井沢産 いよいよこみつかるフリーマーケット

発行：群馬大学社会学部地域社会学研究部
企画・編集・制作：群馬大学社会学部「きたがる」編集部

Take Free



◇本誌についてのご意見・ご感想をお待ちしています。
下記の住所に官製はがき、またはメールアドレスにメールでお寄せください。
〒371-8510 群馬県前橋市荒牧町 4-2 群馬大学社会学部総務係「きたがる」係
[Mail]kitakaru3@gmail.com
◇ご質問につきましては下記の住所に官製はがき、またはホームページ「じねんびと」の問い合わせフォームにお寄せください。
〒371-8510 群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢 1924-1360
[URL]http://jinenbito.jp/mailform/pgdmailform.cgi